

これまで会員の近況報告や意見等を掲載してきた「VOICE」会員の声」欄は、今回から「Hot Line」会員の広場」と改め、編集部で皆さんの近況などについてまとめさせていた



◆ 井坂保子さん (財団法人笹川スポーツ財団業務部)

井坂さんは大学院のときに女性を対象に「ボディ・イメージとスポーツの活動状況との関連」を調べたのが、女性スポーツに関心を持つきっかけだったそうです。現在は生涯スポーツ振興団体である笹川スポーツ財団の調査研究課に所属し、主にスポーツ人口の調査の仕事や、スポーツプログラムの開発等を行っています。

この夏、八月三日から十一日まで、「日本・サハリン親善少年サッカー交流」で世話役としてロシア連邦サハリン州を訪れました。東京都と清水市から選ばれた小学校六年生を中心とするチームが、サハリンのサッカー少年たちと、親善試合をするためです。

清水からは紅一点で唯一の中学一年生、三森裕子さんがいました。その実力もさることながら、「非常にサバサバとしてしっかりした女の子で、男子だけのサハリンチームを相手に物おじせず、とても頼もしい限りでした」

もう一つ、井坂さんの心に強く残ったのが在留邦人と日本の領土だったこ

とを示す古ぼけた日本語の看板。その名残が町のあちこちで見られました。戦後、日本に帰りたくても帰れない在留邦人の、特に年配の女性たちが精一杯応援してくれたのが「何よりもうれしかった」とのことでした。

◆ 荒川御幸さん (財団法人日体スリーダーを務めた荒川さんは、現在も指導者の育成に力を入れています。)

十一月十八、十九日、東京体育館で開かれる(社)日本エアロビクス連盟主催の競技大会では審判をすることになり

ました。「これまでかかわってきた体操競技とエアロビクスは共通点が多い」ということで、今回、審判を引き受けたそうです。

十八日の、「JAPAN CUP 93 全日本エアロビクス選手権」は各地区代表の五チームが日本一の座を目指します。

翌十九日の、「エアロビクス・チーム・チャレンジ93」はエアロビクスの普及を目的とした大会で、こちらは、誰でも参加できます。今まで一般参加の大会はあまりなかったそうです。大会をひとつの機会に、「より多くの人

が、スポーツに親しめる場が増えれば」と話しています。

◆ 戸塚眞佐子さん (日本グラウンドゴルフ協会総務部長)

日本グラウンド・ゴルフ協会は今年七月で創立十周年を迎えました。平成三年三月には、念願の(財)日本体育協会への準加盟を果たしています。この一年で会員が二万人も増え、今は四万三千人。各県協会も現在四十都道府県にあり、全都道府県への設置も時間の問題でしょう。組織の拡大に比例して戸塚さんの仕事量は激増。六月など「休日ゼロで乗り切った」とそうです。

この十年、事務局運営をほとんど一人でしてきました。つらかったことも嬉しかったことも数えきれないと思います。モットーは「辛抱と忍耐」。「明日はいいことがあるだろう」の精神で、仕事に手応えを感じ始めたのは五年目ぐらいから。各地をまわる機会も多く、「全国友達だらけ。私を支えてくれてる方々に感謝をするばかり」と謙虚です。

九月二十五日に、秋田で「東日本地区グラウンド・ゴルフ指導者養成講習会」を開催しました。初めて迎えた女性講師が三ッ谷洋子さん。(WSFジャ

パン代表)「三ッ谷さんは私よりも年下だけれど、憧れの女性なんです」。女性の視点からの「生涯スポーツの現状と今後の展望」についての講演はとても好評だったということです。

今の悩みは、「二代目」がいないこと。線香花火ではイヤだからと、後進の育成も含めます。充実の戸塚さんです。

◆ 八木楠代さん (東京女子大学 三年生)

現代文化学部のコミュニケーション学科の三年生。「知人からWSFジャパンのことを教えられた」と、七月末に事務局を訪ね、その場で入会してくれた新入会員です。

来年の卒論のテーマとして、「スポーツジャーナリズムのなかで女性はどう生きてきたか」を取り上げたいと思いつき、資料集め、情報収集をしているそうです。

具体的には、WSFジャパンの創立者であり、元スポーツ記者であった三ッ谷洋子さんをクロージアアップし、「ジャーナリズムの世界では低く見られているスポーツ分野で、女性記者としていかに生きてこられたか」。また「WSFジャパンの歴史、目的、現状、今後の課題」などを合わせて調査して、卒論としてまとめたいとのことでした。

「ファン」の皆さまのご期待に沿えるよう、立派な人間になるため、日々、努力してまいります……。三ッ谷

Hot Line 会員の広場